



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域の「マイナスの存在」をプラスにする資源化プロセス：グローバル思考による地方創生と観光創造への挑戦
Author(s)	福山, 貴史
Citation	CATS 叢書, 11, 299-305
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66663
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_39.pdf



地域の「マイナスの存在」をプラスにする資源化プロセス

～グローバル思考による地方創生と観光創造への挑戦～

福山 貴史

北海道大学観光学高等研究センター博士研究員

1. 地域における「マイナスの存在」と人々の関わり

(1) 研究の目的と背景

今、「地方創生」は地域活性化の標語のように全国に浸透している。2014 年に「まち・ひと・しごと」創生法が成立し、地方創生担当大臣は、地方創生を通じて日本の社会全体を活性化するために、人口急減・超高齢化という「ピンチ」を「チャンス」に変えることが必要だというコメントをその日に残した。

地域の衰退に関心が集まるこのような時代においては、地域が主体的に地方創生を推進することが課題となっている。特に 2000 年代に入り、地域住民が主体となり地域振興を図る「地域づくり」が各地方において見られるようになった。「馬路村の柚子」や「丘のまち美瑛」に代表されるように、食や景観などの地域資源を利活用した地域ブランドを創出する動きは、今ではごく当たり前の取組みのようになっている。このような取組みは、交流人口の拡大や外部資金の調達等に効果を創出する可能性を広げるため、地方創生の切り札の一つとして捉えられている。

こうした状況を背景に、地元住民の生活環境や地域経済に悪影響を及ぼす「マイナスの存在」を敢えて利活用し、地域づくりに繋げようとする動きが見られる。それは例えば青森県五所川原市の「地吹雪ツアー」などである。地吹雪は地元住民を脅かす存在、いわゆるマイナスの存在であるが、この地吹雪を観光資源とする体験ツアーが人気を呼んでいる。これは地域の関係者による逆転の発想と克服の取組みによってマイナスの存在をプラス転換させた好例であり、外国人観光客を誘致する程人気のツアーに変貌を遂げた。地吹雪を「わざわざ」体験しに五所川原市に行こうとする観光現象が創造されたのである。

人口減少などで疲弊する地域に追い打ちをかけるように悪影響を与えるマイナスの存在を観光資源化する動きは、交流人口の拡大や一定の経済効果に繋がり、地域づくりに寄与する。まさに一石二鳥である。では一体、どのような経緯で地域のマイナスの存在はプラスの観光資源に転換されるのだろうか。もしその経緯や仕組みを明らかにし、さらにモデル化できれば、他の地域を脅かすマイナスの存在をプラス転換し、観光資源として利活用する何らかの方策を提言できるのではないか。ここに筆者の問題意識と研究目的がある。

(2) 地域の「マイナスの存在」とは何か

本研究テーマを議論するために、マイナスの存在をここで定義したい。マイナスである状態とは、不利益なこと、悪いことなどといった一般的な解釈は当てはまるだろう。しかし、ここで問題となるのは、「誰にとって」「どのように」マイナスなのか、という点である。この問題はとても奥が深い。そこで本研究では、この「誰」を「地域社会を構成する相当数の地元住民や代表的な社会集団」とし、「どのように」を「その地域の生活環境や社会経済に対して何らかの不利益や脅威を与えるように」と、それぞれある程度広義に解釈し議論をスタートする。

(3) マイナスの存在のプラス転換による資源化の事例

地域のマイナスの存在を上述のように捉えれば、地吹雪以外にもそれは数多く存在し、資源として利活用する事例も散見される。例えば、うだるような日本一の「猛暑」体験を売る岐阜県多治見市の観光資源化の取組みがあれば、逆に日本一の「極寒」を利活用した北海道陸別町の「しばれフェスティバル」もある。

歴史を紐解けば、今は行楽地である「浜辺」は、かつて人々にとって恐怖の対象でしかなかった。海は「悪魔」のような存在で、そこには「怪物」たちが住むと考えられていた (Corbin 1992) が、長い年月をかけ、多様な人々の多様な働きかけによって、浜辺は見事にレジャースポットへと昇華した。

(4) 「白い悪魔」の流水と「厄介者」のエゾシカのプラス転換

本研究の事例として、北海道特有のオホーツク沿岸地域の流水を先ず取り上げる。かつて流水は地域にとってマイナスの存在であった。流水到来による漁業被害や海難事故など、漁業を生業とする相当数の地域住民の生活に不利益をもたらしていた。地元の漁師たちは「流水早期退散祈願祭」を開催 (青田 2009) する程、流水を敵対視し、当時の流水は「白い悪魔」とされていた (中村 1992)。

次にエゾシカであるが、道内では特に道東を中心に地域の「厄介者」とされ、毎年甚大な農林業被害を地域にもたらしている。その被害額は毎年 40 億円以上と推定されており、エゾシカはいかに地域にマイナスの影響を与えているかが分かる。またエゾシカ肉は固くて美味しくないと市場には受け入れられず、さらには、生態系バランスの喪失や車や JR 列車との衝突事故の発生など、エゾシカが厄介者と疎まれる事象が増えている。2011 年に、根室管内では、エゾシカとの衝突事故の件数がついに人身事故の件数を上回り、5 人に 1 人がエゾシカとの事故に遭遇したと答えている (北海道新聞 2012)。

しかしエゾシカは現在、食や観光の資源化の動きが進んでおり、例えば知床産のエゾシカ肉は、2013 年に「ISS 国際宇宙ステーション」の宇宙食に採用された。さらに札幌市内で道産食材を直売する「HUG マート」では、国内外の観光客向けにエゾシカ肉のアンテナショップが設置されている。またエゾシカのエコツアーやハンティングツアーなども道内

各地域で開発され人気を呼んでいる。

また、流水については既に世界に誇れる観光資源となった。流水とその砕氷船「ガリンコ号」は北海道遺産に、そして流水が生み出す音は日本の「残したい音風景 100 選」に認定されている。「流水ウォーク」や「流水ダイビング」なども体験可能で、外国人観光客にも人気である。かつての「早期退散祈願祭」は、いつしか「早期到来祈願祭」に転換された。地域のマイナスの存在がこうしてプラス資源に転換される過程をそれでは見ていこう。

2. 地域の実践によって資源化された流水とエゾシカ

(1) 流水の資源化に向けた地域の実践

流水を初めて観光資源化した北海道紋別市には、かつて「流水画家」と呼ばれ、生涯で 3,000 点以上とも言われる程、流水ばかりを描いた村瀬真治氏がいた。I ターン組だった村瀬氏は当時まだ「白い悪魔」だった流水に出会い、感動し、流水だけを描き続けた。その行為自体に猛反対だった地元住民が村瀬氏を殴ったという逸話があるが、村瀬氏は負けずに、流水の魅力を「オホーツク流水展」の開催を通じて、道内のみならず道外にも広めていった。また、彼は地元の子供達のために日曜絵画教室も開いた。

さらに、50 年以上の歴史を誇る「もんべつ流水まつり」の提唱者と言われる田中峰雲氏の存在がある。極寒に閉ざされた紋別の暗い冬でも、流水の観光資源化の可能性を信じ、周囲の反対を押し切って祭りを開催した。また、田中氏はアイヌ文化にも精通していたので、流水を題材にしたアイヌ風紙芝居を創作し、地域の子供達に語り伝えた。

村瀬氏や田中氏のこのような働きかけとは別に、青田昌秋氏の実践がある。青田氏は、世界的に有名な流水研究の第一人者であり、その研究の最中に、アイス・アルジーと呼ばれる藻類が流水の下に付着しているのを発見した。このアイス・アルジーは食物連鎖の起点となり、オホーツクの漁場を豊かにしてくれることが科学的に解明された。流水は漁師の敵ではなく、実は味方だということが分かり、青田氏はその価値の発信に努めた。

(2) エゾシカの資源化に向けた地域の実践

道内で初めて「ご当地グルメ」としてエゾシカ肉を商品化したのは、2003 年に阿寒町で「エゾシカバーガー」を開発した曾我部氏である。地域づくりの起爆剤としての発案であったが、「YAHOO!ニュース」に取り上げられた時、全国から抗議の電話が殺到した。しかし、今では B 級グルメの祭典「B-1 グランプリ」のエゾシカ版とも言える「エゾシカ料理グランプリ」が開催されるまで、その利活用は広まっている。また、ご当地グルメとは性質の異なる「ジビエ文化」がある。2007 年の札幌開催を皮切りに、釧路や富良野でもこのジビエを堪能できる「エゾシカ料理まつり」が開催された。

ジビエ文化は、狩猟文化と密接に繋がっている。エゾシカを貴重な資源とし、食文化や狩猟文化の両面からその価値を社会に啓発しようとする女性ハンターの会「TWIN (The

Women In Nature)」が2012年に道内で設立された。TWINの活動は、狩猟鳥獣を食卓にのせることで野生生物と人間社会との関わりを取り戻すことを前提とし、女性であり猟師でもある独特の立場から、次世代への食育もその活動の射程に入れている。

以前は固くて美味しくないとされていたエゾシカ肉の品質も、科学技術の進歩と共に改善されてきた。2012年には道内のエゾシカの食肉処理業者が初めて HACCP の衛生管理導入の評価を受け、さらに道庁が策定したエゾシカ衛生マニュアルやトレーサビリティのチェックを遵守するためのエゾシカ肉奨励制度も（社）エゾシカ協会によって開始された。

また、2004年には釧路短期大学の岡本匡代准教授らによって、エゾシカ肉は高タンパク質で低脂肪、さらに鉄分の含有量が多いことが証明され、ヘルシーな機能性食品としての認知が広まり始めた。エゾシカ肉は釧路管内の小中学校の学校給食にまで導入され、「食育だより」を通じてその価値が伝達されている。また、道内全域では毎月第4火曜日を「シカの日」と定め、エゾシカ肉の魅力と消費拡大をPRし資源化を進めている。

(3) 2つの事例に共通する資源化のメカニズム

上述のように、白い悪魔の流水も厄介者のエゾシカも地域関係者の取組みによって資源化が促進されたが、その過程には共通事項が存在する。地域のマイナスの存在がプラス転換される過程に見られた取組みは「地域文化」と「科学技術」の2つにカテゴリー化され、この2つのカテゴリーはさらに「価値づけ」と「価値の伝播」のアプローチ別にそれぞれ分類できることが分かった（表1）。

表1 流水とエゾシカの資源化のメカニズム

	価値づけ	価値の伝播
地域文化	文化的ブランディング (流水画／エゾシカバーガー等)	文化的マーケティング (オホーツク流水展／学校給食導入等)
科学技術	科学的ブランディング (アイス・アルジー効果／栄養特性等)	科学的マーケティング (北方圏国際シンポジウム／食育だより等)

出所) 筆者作成

(4) 資源化プロセスとその応用可能性

表1で示したように、流水とエゾシカの資源化の取組みは、「文化的ブランディング」「文化的マーケティング」「科学的ブランディング」「科学的マーケティング」の4分類が可能である。この点において資源論の大家である Zimmermann (1985) は、資源化の過程には、人間による「文化的な欲望」や「科学・技術を含む能力」が含まれると示唆している。地域文化は地域の暮らしにおける人々の多様な楽しみ方を、そして科学技術は原理に基づく安心安全の保証や不安の払拭といった効果を創出するところでは捉える。

さらに敷田ほか(2009)は地域づくりを成功させる際には「ブランディング」と「マー

ケティング」を組み合わせることが、関係性を築き新規顧客を獲得する上で有効としている。これらは地域文化や科学技術のそれぞれのカテゴリーにおいて、価値づけの実践とその価値の地域内外への伝播として資源化のメカニズムに内包されている。

また、4分類をそれぞれ代表するキーパーソンが相互に連携しながら継続的に資源化を推進していることも分かった。こうした連携と、周囲の抵抗や反対を乗り越える継続的な資源化メカニズムの実践をもってマイナスの存在の資源化プロセスとしたい。今後このようなプロセスを多角的に検証し、モデル化することができれば、例えば危険な「雪崩」現象の観光資源化の過程に応用できるかもしれない。

3. グローカル視点からみる資源化プロセス

(1) グローカルとは何か

今改めて、グローカルのもつ意味に焦点を当てたい。グローカル（GLOCAL）とは、グローバル（GLOBAL）とローカル（LOCAL）を掛け合わせた造語で、地球規模の視野と草の根の地域の視点で様々な問題を捉えていく考え方（大辞林 2006）である。宮町ほか（2008）は、両プロセスは同時進行するだけではなく相互に影響し合うとし、また一村一品運動の提唱者である平松元大分県知事も、1990年代から“Think globally, act locally”の考え方を取り入れ、両プロセスを対置ではなく相互に作用を及ぼす関係にあると説いた。

(2) グローカル視点からみる流水の資源化プロセス

このグローカル視点に立脚すれば、マイナスの存在の資源化プロセスに見られた地域の取組みも説明が可能である。例えばアイス・アルジー効果等の流水のもつプラス機能は世界的にも立証され、地元紋別市民の協働によって開催が実現された「北方圏国際シンポジウム」を通じて流水の価値は地域から地球規模に広く伝播された。流水まつりなども地域関係者の力で継続実施しており、雪を見たことのない外国人観光客をも魅了している。

(3) グローカル視点からみるエゾシカの資源化プロセス

エゾシカの資源化の取組みにもグローカルなコンセプトは見られる。例えば地域づくりのために開発されたエゾシカバーガーが出現し、その発案の延長上にある海外のジビエ文化を取り入れたエゾシカ料理まつりの地域開催に繋がった。また、狩猟文化についても、道内ではエゾシカのハンティングツアーを堪能できる「猟区」があるが、将来的にはヨーロッパやロシアなどから狩猟者を誘致できないかという議論が行われている。エゾシカの資源化にもこうした地球規模に視野を広げた地域の取組みが少なからず貢献している。

(4) グローカル思考による価値の顕在化

このように現在の地域においてはマイナスの存在であっても、地球規模の広い視野で対

象を捉え直すことで、潜在的価値が顕在化する可能性が生じる。上述した逆転の発想とはまさにグローカル思考と言っても過言ではない。ローカルな資源価値を再発見し、その価値を広い視野で地域内外に伝達できれば、マイナスの存在はプラス転換されグローバルな観光資源となる可能性は高まる。地元で深刻な被害をもたらしていた「地獄谷のサル」の観光資源化の事例はまさにその典型であろう。

4. グローカル思考と観光創造の可能性

(1) グローバルなインバウンド観光客の時代

今、時代はインバウンドの波が押し寄せている。2016年の訪日外国人観光客数は、前年比21.8%増の2,400万人を突破し、過去最高を記録した。2020年のインバウンド目標数4,000万人に向け堅調な動きを見せている。また北海道においても、2020年の外国人観光客数を現在の約2.5倍の年間500万人に増やす目標を掲げている。札幌駅を歩いても、外国人の方が多いのではないかと思わせる風景も今や珍しくはない。受け入れ側の私達にとって観光のグローバル化は既に身近なものとなっている。

(2) ローカルな地域づくりと地域資源の固有性

一方、冒頭で述べたように、地域が主体的に地域づくりを推進することは喫緊の課題である。グローバル化の流れで社会・経済システムが均一化し、生活様式や地域文化さえも多様性の喪失の危機にさらされる状況の下、「地元学」に代表されるように、その地域にしかない固有のモノやコトの価値を再評価しようとする動きが活発化している。このようにグローバル時代においては、地域の個性に価値を置き、地域の固有性を特色とするローカルな地域づくりの重要性を再認識する必要がある。ここにグローカル思考の醍醐味がある。

(3) グローカル思考とマイナスの存在の資源化の繋がり

上述のような議論をもってグローカル思考から読み解けば、地域のマイナスの存在とは地域の固有性そのものである。流氷もエゾシカも、グローカルに捉え直し、固有な資源化への取り組みを実践することでプラス転換され観光資源化された。こうして見ると、マイナスは本当にマイナスなのか、その「当たり前」とされる概念を疑い、その認知を複眼的に捉え直す事が重要なのであろう。その際にグローカル思考は有益なアプローチであり、外国人観光客の視点を利活用する姿勢はマイナスの存在の観光資源化にとって有効である。当たりの概念は、グローカル思考の前ではパラダイムシフトの対象に過ぎないのである。

(4) グローカル思考による地域観光創造への挑戦

中国古典『易経』は、観光の本義を「国の光を観る」ことよりも、「国の光を示す（観せる）」ことにあると示唆している（石森 2008）。地域のプラス資源を観せることは勿論観光

振興の醍醐味であろう。しかし、地球規模の視野と地域の視点を具有するハイブリットなグローカル思考で捉えれば、マイナスの存在も地域固有のプラス資源と再評価できる可能性が生じる。流水の資源化プロセスに代表されるように、地域の誇りとしての認識が地元住民に醸成され、まさに国の光として観せることに繋がるのではないだろうか。それは真の地方創生に向けた、実現可能な地域観光創造への挑戦である。観光はこのような無限の可能性があり、観光創造はかくのごとく面白い。「マイナスの存在」×「グローカル思考」で「ピンチ」を「チャンス」に変える逆転の観光創造の光が存在することを、ここで示したい。

文 献

青田昌秋

- 2009 「流水祈願祭今昔」(社)日本雪氷学会北海道支部設立 50 周年記念誌編集委員会編『雪氷研究の系譜 -北海道の雪氷から世界の雪氷圏まで-』,(社)日本雪氷学会北海道支部。

コルバン, A.

- 1992 『浜辺の誕生 -海と人間の系譜学-』福井和美訳, 藤原書店。

松村明編

- 2006 『大辞林』三省堂。

北海道新聞釧路版

- 2012 「シカとの事故 人身より多発」(2012 年 2 月 29 日付)

石森秀三

- 2008 「観光立国時代における観光創造」石森秀三編『大交流時代における観光創造』pp.1-20, 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院。

宮町良広ほか

- 2008 「序章「グローカル化」とは何か」大分大学経済学部編『グローカル化する経済と社会』pp.1-20, 株式会社ミネルヴァ書房。

中村圭三

- 1992 『流水の来る街』, 古今書院。

敷田麻実・内田純一・森重昌之編著

- 2009 『観光の地域ブランディング -交流によるまちづくりのしくみ-』, 学芸出版社。

Zimmermann, E. W.

- 1985 『資源サイエンス -人間・自然・文化の複合-』石光亨訳, ハンシカー編, 三嶺書房。